

ここに、建築は、可能か

津波によってすべてを流されたまち、  
人々は家族や友人を失い、家を失った。  
この人々のために、建築家は何が可能か。

近代以降、建築家は、個のオリジナリティを根拠にして建築を考えてきた。  
しかしそれは建築家による建築家のためのエゴイズムではないのか。  
建築家は一体誰のために、そして何のために建築をつくるのだろう。

私たちは被災地に一軒の小さな共同の家「みんなの家」をつくることによって、  
個による個としての建築家のあり方を根底から問い直そうと試みる。  
「みんなの家」は失われた家の記憶を蘇らせる。人々は家を求めてここに集まり、  
語り合い、飲み、食べ、心を暖めあう。

この家をつくるプロセスにおいて、もはや「つくり手」と「住まい手」の境界は存在しない。  
現地の人々とわれわれは共に考え、考えながらつくり、  
つくりながら考える。時に住まい手はつくり手であり、つくり手は住まい手である。

「みんなの家」はガレキの間から立ち上がってきた植物のように、  
「上昇する生命体のような建築」である。  
それは仮設の家であるが、復興への強い意志を象徴する。

「みんなの家」は建築家をつくる家でありながら、  
個のオリジナリティに固執しない。建築家は住まい手と意識を共有し得る。  
個によって個を超えることは可能か。近代を超える鍵がここにある。

私たちはこの一軒の「みんなの家」をつくるプロセスのすべてをドキュメントとして  
展示し、来訪者に「建築とは何か」を問いかけたい。

2012年8月28日 伊東豊雄

(ヴェネチア・ビエンナーレ日本館入り口展示コンセプト文より)